

第22回委員会会議結果概要(案)

開催概要	
日時	平成20年10月3日(金) 18時00分～20時40分
場所	船橋商工会議所 6階 ホール
参加者数	40名
出席委員	16名(遠藤茂勝、倉阪秀史、榊山勉、及川七之助、澤田洋一、 上野菊良、竹川未喜男、三橋福雄、後藤隆、佐々木洋晁、 松崎利光、田草川信慈(代理)、下原慶啓、増岡洋一、鯉淵彰) : 委員長
結果要旨	
<p>議題</p> <p>第21回委員会の開催結果概要</p> <p>資料1により確認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質疑なし。 <p>護岸バリエーションの検討の進め方について</p> <p>報告事項(4)「三番瀬再生実現化試験計画等検討委員会での検討状況」と併せて、資料2により事務局から説明があり、質疑応答および意見交換が行われた。</p> <p>[主な意見及び対応]</p> <p>< 後藤委員 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・干潟的環境形成に係る試験案の場所と、護岸のモニタリングの測線が近いので、試験の場所を少し離れた方がよい。 <p>< 佐々木委員 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・干潟的環境形成に係る試験のスケジュール的なことは、どのようにイメージしているのか。 <p>< 倉阪委員 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ的なものを可能な限り早く開催しなくてはいけないと考えている。 <p>< 三橋委員 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・後背地のまちづくりはどのような状況なのか。 <p>< 田草川委員(代理)森川課長 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・当初考えていた商業系が今の景気からすると難しいので、事業系(事務所系)を模索している。 <p>< 倉阪委員 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・1期地区のグリーンベルトは、どのように確保できる見通しになるのか。 <p>< 田草川委員(代理)森川課長 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在、海岸線のほうに市有地をもっていこうという考えはある。 	

<三橋委員>

- ・護岸のあり方とグリーンベルトのあり方は関連が高い。考え方をすり合わせる必要がある。

<後藤委員>

- ・2期地区はもう議論していてもしようがない部分である。保全ゾーンは粛々とやっていき、親水ゾーンは議論をきちんとし、まちづくりの姿が見えてきた時に対応できるようにしておくという方法しかないと思う。

<竹川委員>

- ・市川市さんは、護岸のほうを先にきちんと決めてほしいという要望が強いように承っているが、護岸を先に決めなければまちづくりが進まないというのは、おかしい。河川の分野ではないと思うので、ワークショップの中である程度煮詰めておかないといけない。

<松崎委員>

- ・まちづくり懇談会で、もう具体的な青写真ができていたと思っていた。具体的な計画が決まっていないのであれば、まちづくりの計画と護岸の計画をすり合わせなければいけない。

<田草川委員(代理)森川課長>

- ・現在、親水ゾーンについては市有地がない、それが大前提である。今、地権者とこれからのまちづくりを詰めているところである。現在、具体的な絵はまだ出していない。

<佐々木委員>

- ・護岸のできあがる時期以前に形は決めたいということで、今、地権者と市川市とで詰めているところである。10年後というスタンスで2期を考えているが、1期については着々と進めている。

<倉坂委員>

- ・自然再生の場、あるいは中央公園などを活用しながら、曲線的な形状のものがつくれないかというのも合わせて、まちづくりで考えてもらおうとありがたい。
- ・マザーゾーンとしている部分は人の目が届くので、子供たちが遊べるところになるのかもしれない。マザーゾーンはここではないと思う。
- ・砂を徐々に補給しながら自然の力に任せて、どういうものが再生していくのかをやる場所をどこかにおいておく必要がある。そのようなところは、人が入らなくていいのかもしれない。人が入るところは、まずはコントロールできるような範囲ではないか。だから、親水ゾーンといって全て開放するような形にするのは違うと思う。

<倉坂委員>

- ・親水ゾーン、保全ゾーンが何を意味するのか、共通認識をもって議論を進めないと、議論がかみ合わなくなる。

<遠藤委員長>

- ・県は、言葉の範囲をどのように考えているのか。

事務局回答

- ・親水ゾーンは、目でみる親水も当然だが、水に近づけるようなもの、水と触れ合えるようなものもあると考える。保全ゾーンは、下におりられず、そこに棲む生物の環境を守っていくようなゾーンだと考える。

<佐々木委員>

- ・規模的に考えて、親水ゾーンをつくって意味があるのか、保全ゾーンが必要なのか。それとも、後ろが開発された時に、保全ゾーンが親水ゾーンに変わることができるのか。変わることができるならば、それに合わせて変化させていけばよいが、変われないのであれば、この規模で本当にバリエーションをつけた海岸と言えるのか。

<後藤委員>

- ・ゾーニングという考え方自体はいいと思う。あまり言葉にこだわらず、しようがない部分と少し皆で頑張ればいいものができるかなという部分で、今のところ抑えておけばいいのではないか。

<三橋委員>

- ・ゾーンの名称に偏ることはない。
- ・親水ゾーンと言われているところにある程度理想的なものができると、当然、次の保全ゾーンをやる時に影響を与える。そのようなことでいいのかなという気がする。

<神山委員>

- ・時間的に余裕があれば、保全ゾーンにも親水性を考えたバリエーションを考えていけばよいが、今のところそういった余裕が少しないと思う。保全ゾーンと呼ばれているところに、少しでも景観を盛り込むことを考えたほうがよい。
- ・波の打ち上げを防止する機能は、グリーンベルトがもつのではないか。それができない、できるでは背後のまちづくりにもかなり影響すると思う。

<遠藤委員長>

- ・グリーンベルトはまだ具体的に検討が進んでいないので、防災面については、そういうことを実施する段階に工夫されると思う。
- ・具体的な案を委員会がはっきり出していないといけない。つくった以上は、県も管理していかななくてはならないので、何か問題が起き、危険だということになると、立ち入り禁止というようなことにもつながってってしまう。また、住民の意見を代表するような形でいろいろなことを織り込んでおかないと、十分使えるような状態になっていかない。

<佐々木委員>

- ・ゾーンの定義がつくのか。

<事務局>

- ・ゾーンの名称はイメージしやすいようにつけたもので、名称、中身についてはこれから検討していくものである。

< 遠藤委員長 >

- ・陸側が大きく二つに分けられたので、それに対応した海側のゾーンが想定されたというように考えるとよい。

< 上野委員 >

- ・単純に、1期、2期というゾーンで分けたほうがいいのではないか。ゾーンの名称を決めるからおかしな話になってしまう。

< 倉坂委員 >

- ・時間の流れを考えて、西のほうから徐々に自然再生をしていくのが、妥当だと思う。2期のところはもう入らないことを前提として、かっちりつくってしまっているのか問題提起する。1期、2期というようにあまり明確に分ける必要はない。

< 遠藤委員長 > まとめ

- ・もう少し具体的に検討していかないと、そのまま工事が進んでいくという認識をもってほしい。検討の進め方の一つはゾーンを分けて考えるということだが、ほかの考え方があれば、また提案してほしい。

平成21年度実施計画(案)について

資料3により事務局から説明があり、質疑応答および意見交換が行われた。

[主な意見及び対応]

【 工事内容 】

< 倉坂委員 >

- ・私のイメージだと、区間は自然再生の場から曲線状にもってくることで、最小限の工事にとどめておいたほうがよい。案2で最小限の倒壊防止を行うことに合意する。

< 佐々木委員 >

- ・案2で進めてほしい。民地の部分が倒壊しなくなる。

< 遠藤委員長 > まとめ

- ・案2の「陸側のH鋼杭と鋼矢板の工事+未着手区間の捨石工事」で進めていくこととする。

【 モニタリング調査 】

< 倉坂委員 >

- ・専門家へのヒアリングというのは蓮尾さんのことか。

事務局回答

蓮尾さんに相談し、塩浜付近で鳥を観察している方を教えていただいたので、その人たちと相談しながらモニタリングをしていきたい。

< 榊山委員 >

- ・波浪・流況調査を今後実施しないことは、非常に残念である。今後、地形変化などがあった時に、何らかの方法で予測できると思うが、予測するためには、周辺での観測データが必要になってくる。周辺で波浪、流速を観測している地点はあるのか。

事務局回答

千葉港で波高観測をしている話は聞いたことがある。ただ、今観測しているかは確認できていない。

< 榊山委員 >

- ・どのようなデータを入手できるか把握しておいたほうがよい。

< 榊山委員 >

- ・2年間の調査により、目的とされる外力が把握されたという書き方は、納得できない。
- ・この定常の波浪、流速は非常に小さいということが、2年間の観測でわかったというのは納得できる。

< 後藤委員 >

- ・専門家とよく相談して、予算的な問題もあると思うが、できれば続けていったほうがよい。

< 遠藤委員長 >

- ・調査の期間が非常に短いので、いろいろな状況を把握するのは、なかなか難しい。基本的には継続してほしいが、予算的に難しいということか。

事務局回答

予算的なものも大分ある。新しい調査項目も増えているので、どこかを削ることも必要になってきている。

< 遠藤委員長 >

- ・調査は継続するところに意味がある。何らかの形で推測できるように準備だけしておいてほしい。

報告事項

工事の実施状況，公開調査・現地見学会の開催状況，夏季モニタリング調査の速報

- ・資料4、資料5及び資料6により事務局から説明があった。

その他

< 事務局 >

- ・次回委員会を11月上旬に開催する予定である。

傍聴者からの意見

- ・生物の冬季調査は継続すべきである。四季を通じて生物の動きをみるのは大事である。